

清末期における中国人留学生とナショナリズム

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期

学生番号：D173911

氏名：張潔

序章では、問題意識と先行研究の検討を行った。

近代中国における女子教育の出現・発展の過程という観点からは、1901～10年にかけての時期は極めて重要であったといえる。1907年清国が正式に女子教育に着手するまでは、実践女学校をはじめ日本の女学校が中国の女子教育を推進する役割を果たしていたともいえる。石井洋子（1983）と周一川（2008）は、主に中国人女子留学生たちの社会活動と革命運動との関わりの観点からなされてきた。しかし、良妻賢母女子教育の実態については、あまり具体的に解明されてこなかったといえよう。

第一章「下田歌子の『良妻賢母』女子教育観」では、下田歌子の国体論的な国家観と結びついた良妻賢母教育思想について検討した。

良妻賢母教育思想は日本で明治期以降主軸となり、高等女学校を中心に良妻賢母育成が目ざされていた。そこで行われていた女学校での良妻賢母教育は、家庭における女子の日常的な役割を固定化することを求めるものであった。ところが、下田歌子は海外留学の経験で直接耳にした黄禍論と進化論から、西欧諸国によって東アジアが蚕食される脅威を感じ、国民国家の形成の必要性も認識したのである。そして、下田は日本の歴史に見出される国家的伝統の独自性を主張し、日本固有の武士道的精神を基礎とする伝統的精神教育を提出し、その文化的価値を擁護して女子教育を発展させたいと考えていた。このように、彼女は通常の良い妻賢母教育にとどまらない、「国体論・武士道」と結びついた国家意識の涵養を強調したのである。そこで実践女学校を設立し、彼女なりの良妻賢母教育を実施していったのである。下田の良妻賢母教育論が「国体論」的国家意識を基盤としたという点は、これまであまり注目されてこなかったといえる。

第二章「日本人女子学生と良妻賢母思想」では、日本人女子学生は良妻賢母教育をどのように受け止めていたのかを検討した。

「私立実践女学校規則」と「寄宿舎規則及び寄宿生心得」を分析して実践女学校は「賢母良妻」を育成しようという実践的な女子教育の構想を目指すものであった。また、下田歌子は寄宿舎での人間形成のための集団自立の教育を重視していた。寄宿舎で「練習生活」として、女学生を将来妻・母になるための準備も行った。姜華の研究によれば、明治後期の高等女学校の生徒は、学校関係者が説いた良妻賢母的理念を受容したという（姜華 [2015]）。日本人女子学生の回想文と父兄からの感謝状に見られるように、ここでの良妻賢母的理念は一般的な「良妻賢母」像だと思われる。このように、実践女学校の日本人女子学生も通常の良い妻賢母像を受容し、「国体論」的国家意識の涵養という点では成功しなかったと思われる。

第三章「清末中国人女子留学生と実践女学校の教育」では、実践女学校での中国人女子留学生教育を検討した。

実践女学校は、明治期後半中国人女子留学生在日本で学ぶ際の中心的存在であった。下田の良妻賢母教育を検討するうえで、中国人女子留学生という視角は別の意味を浮かび上がらせてくれる。まず一点目に、留学生の多くは国家・国民意識と良妻賢母主義を切り離し、且つ中国情勢の現実から日本の国体論的視角をも排除して民族自決主義にもとづく国家・国民意識を形成するに至ったということである。これは彼女らが投稿した論説から、その一端がうかがえる。二点目として、良妻賢母論と決別した彼女らが、男子留学生たちの論説にも影響されて、すべてではないにせよ女性解放（「女権」）の思想を獲得していったということである。これも、彼女らの投稿に表れている。実践女学校で下田が極力抑制しようとしていた彼女らの思想的展開が、皮肉にも実践女学校在学中に進展していたわけである。この点は従来の研究でも指摘されてはいたが、同校での学びに即して改めてとらえ直していく必要があると思われる。すなわち同校での学びと無縁に思想的展開があったのではなく、裁縫や調理など良妻賢母の技術的教育のみならず歴史や自然系の学びを通して世界観を広げ、そのなかから国家・国民意識あるいは女性解放（「女権」）思想さえ獲得していったということである。

一方、中国人女子留学生の間でも、漢族と満族という民族問題が国家意識・ナショナリズムにある種の乖離をもたらすという問題を生じさせた。そこで第四章「中国人留学生における民族的位相」において、清朝の既得権益層に属する旗人（満人を中心）留学生の近代ナショナリズム、とりわけ愛国主義の覚醒を扱うこととした。

清朝政府が封建統治を維持するため、旗人留学生を警察と軍事という国家権力組織に集中させていたからであったと思われる。1901年に留学してきた長福は、すでに新民のモデルとされる近代国家であった日本で、近代的国家・制度・社会・文化を体験し、梁啓超が摂取した西洋近代文明をさらに再摂取した。こうして、長福は生存競争と国家滅亡・満漢矛盾の危機感に直面して、国家という集団を守るために、国民として団結しなければならないと深く認識した。そして、彼らは拒俄運動に参加し、満漢留学生・各省留学生の間の壁を破り、交流を深めていき、旗人としての自己意識から中華民族という理念的に仮構された国民意識を創出していった。さらに近代中国のナショナリズムが留学生たちのなかに徐々に形成されたのである。

第五章「異文化交流と相互認識」では、20世紀初頭の中国人留学生と日本人教職員間の異文化交流について、近代中日交流史のなかの重要な問題として扱った。

教育現場の教職員は、学校という場を通して留学生と直接に接触し、彼らの態度が留学生の人格形成に果たした役割は重要であった。女子留学生中心校実践女学校の教職員たちは中国人女子留学教育に対して近代的知識の伝達より「温順恭謙」の女徳の養成することを重視していたのである。一方、「留学生教育の大本山」宏文学院の校長である嘉納治

五郎は「国家ノ隆運」を進める基礎として国民教育（初等教育）が最も重要なものであると述べていた。そして、国民教育の発達には国民の「智徳体」という「三性」の発達である。この「三性」の発達は直ちに「農工商業」の進歩を招いて「依テ以テ富国強兵ノ実挙ル」という。そこで、国民教育は実に国力に多大な関係があるものである。

さて、日本通として戴季陶は日本侵略政策の責任を検討するときに、普通の日本人に責任はないと主張した。長年間の留学経験で、その責任を「神権思想」あるいは「武士道」という文化的・歴史的背景から究明した。胡彬夏は女子留学生として日本の実践女学校へ一年間を留学した。その後、アメリカで出会った新しい資質を備える女性によって、胡は自分の女性観を反省し、新たな女子教育理念を形成した。日本留学経験は彼女の後の女性観形成に際して、重要な一部となったと思われる。以上のように、留学という異文化交流を通じて、中日両国の民間で相互認識を深めていた。

終章では、論文全体の内容をまとめて今後の課題を述べた。

下田歌子が唱えた武士道・国体論と結びついた良妻賢母教育がどこまで受容されていたのか、いかなかったのかについて検討した。日本人の女学生は、結局のところ国体論的な国家意識までは受容せず、世界観は広げつつも通常の良妻賢母意識にとどまった。いっぽう、中国女子留学生は良妻賢母と結びついた国家・国民意識を切り離し、国家という意識・観念を彼女らなりのフィルターを通して受容し、民族的危機からの解放とともに、女性解放思想も持ち始めたことが明らかになった。ただ、そのなかでも漢族・旗人という民族問題が影を落とすことになり、清朝政府の「宗室子弟」（旗人）の留学政策があっても、旗人留学生は旗人としての自己意識から中華民族という理念的に仮構された国民意識を創出していった。

日本で新知識に触れ、視野を広げた女子留学生たちは、帰国後彼女たちは如何に近代的知識を利用し、さらに広がっていたか。また、日本での留学教育は西欧近代科学の学術知識だけではなく、清潔、衛生や健康など実用的知識も提供した。蒋介石によって1934年2月19日に発し、足かけ15年にわたって大衆動員運動＝「新生活運動」が展開された。留日学生たちはこの新生活運動にどう参加したのかも重要な問題であるが、今後の課題としたい。